

2021 年 12 月

食料安全保障月報

(第 6 号)



令和 3 年 12 月 27 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2021 年 12 月食料安全保障月報（第 6 号）

目 次

概要編

I	2021 年 12 月の主な動き	1
II	2021 年 12 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 史上最高の穀物生産となった中国	4

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	7
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	8
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	9
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	11
5	FAO 食料価格指数の推移	15
6	食品小売価格の動向	16

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	10 月の月間輸出量はここ 30 年で最低水準
	＜カナダ＞	USDA の生産量予測は前月から上方修正され 21.7 百万トン
	＜豪州＞	2021/22 年度の実産量は 34.0 百万トンと史上最高の豊作見込み
	＜EU＞	2022/23 年度の冬小麦はバルカン半島南部等の一部を除き越冬期
	＜中国＞	天候に恵まれ生産量は史上最高の見通し
	＜ロシア＞	生産量は前月に比べ 1.0 百万トン上方修正。品質は良好
2	とうもろこし	8
	＜米国＞	収穫面積増、単収増で生産量史上第 2 位、輸出減の見通し
	＜ブラジル＞	収穫面積増、単収増で生産量史上最高の見通し
	＜アルゼンチン＞	収穫面積増、単収増で生産量史上最高、輸出税は継続
	＜中国＞	生産量下方修正も史上最高、消費量も史上最高の見通し
3	コメ	13
	＜米国＞	輸出入ともに下方修正されるも価格は高値で推移
	＜インド＞	2020/21 年度の輸出量が 20.2 百万トンに上方修正
	＜中国＞	中国全土でコメの収穫が終了
	＜タイ＞	洪水の発生により生産量が下方修正
	＜ベトナム＞	インドからの碎米輸入は食品加工用のほか飼料用やビール用

Ⅱ 油糧種子

大豆・・ 19

＜米国＞ 生産量は史上第2位、輸出減の見通し

＜ブラジル＞収穫面積増で生産量は史上最高の見通し

＜アルゼンチン＞単収増で増産見通し、輸出税は継続

＜中国＞ 収穫面積・単収下方修正で減産見通し、輸入量は史上最高の1億トン

＜カナダ＞ 収穫面積・単収上方修正も、西部での高温乾燥の影響で減産見通し

特別編「ブラジルの農業とコロナ感染拡大の影響」

※ 農林水産政策研究所 研究成果報告会

「ロシア、ブラジル・アルゼンチン、オーストラリアーコロナ禍と農業ー(2021年11月30日)」での林 瑞穂 主任研究官(国際領域)の報告を基に作成。

http://www.maff.go.jp/primaff/koho/seminar/2021/attach/pdf/211130_02.pdf

【利用上の注意】

表紙写真：ブラジル中西部マット・グロッソ州の大豆圃場。9月に作付けされ、天候に恵まれ、生育状況は良好。来年1月には収穫予定(12月5日撮影)。

(概要編)

I 2021 年 12 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2021/22 年度の作況については、北半球はほぼ確定しつつあるが、これから作付け・収穫が行われる南半球は今後も変動する可能性。

品目別にみると、12 月の米国農務省 (USDA) の需給報告では、小麦については、生産量は豪州等で上方修正され史上最高となるものの、米国やカナダの減産により世界の期末在庫率は前年度を下回っていること等から、国際相場は高い水準で推移しており、今後も注視が必要。

一方、大豆・とうもろこしについては、生産量が消費量を上回ると予想され、相場も史上最高水準にまで迫った 5 月頃と比較すれば一段落した感があるものの、期末在庫は依然としてタイトな状況であり、南半球の状況を中心に引き続き注視していく必要。

FAO (国連食糧農業機関) が公表している食料価格指数については、植物油は 10 月からわずかに下落したものの、穀物、乳製品、砂糖の上昇の影響を受け 4 か月連続で上昇し、最新値 (11 月) は 2011 年 6 月以来の最高水準。

海上運賃については、10 月以降、バルチック海運指数 (穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数) は下落傾向が見られるものの、引き続き高い水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、12 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について (農林水産省 HP)

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 豪州の小麦と菜種は史上最高の生産量見通し

2020/21 年度の豪州の冬作物は 2 年連続で降雨に恵まれ、ABARES(豪州農業資源経済科学局)「Crop Report」(2021.11.29)によれば、冬作物の生産量は史上最高の 5,840 万トンの見通し。特に、小麦 3,440 万トン、菜種 570 万トンもそれぞれ史上最高、大麦も 1,330 万トンで史上第 2 位となる見通し。

州別には、西オーストラリア州の冬作物生産量は史上最高の 2,120 万トンで、小麦 1,170 万トン、菜種 280 万トンも史上最高の見通し。ニューサウスウェールズ州も降雨過多で品質低下の懸念はあるものの、冬作物の生産量は史上第 2 位の 1,780 万トン、クイーンズランド州も史上第 2 位となる等、各州とも豊作見通しである。

一方、北米の小麦や菜種等の減産に伴い、豪州への輸入国の買い付けが集中しているが、豪州の輸出港の取扱能力に限界があることから、輸入国から見ると、輸入ロットの確保が困難となり、コストの上昇等の懸念がある。

写真：豪州 南オーストラリア州の
小麦収穫 (11 月 29 日撮影)



2 ブラジルのとうもろこし、大豆の初期生育は降雨により概ね順調

ブラジルにおいては、降雨の少ない南部を除き、北部から中西部にかけての産地に降雨があったことから、とうもろこし、大豆ともに初期生育は概ね順調に進展している。ブラジル食料供給公社 (CONAB) の穀物レポート (2021.12.9) によれば、2021/22 年度の穀物・油糧種子全体の生産量は、干ばつや霜害のあった前年度と比較して 15% 増の史上最高となる 2 億 9,110 万トンが見込まれている。うち大豆は史上最高の 1 億 4,280 万トンの見通し。とうもろこしも夏作は 2,910 万トン、前年度に干ばつや霜害のあった冬作は、前年度から大幅な増産となる 8,810 万トンで合計で史上最高の 1 億 1,720 万トンの見通し。

3 ロシア・ウクライナの輸出規制

ロシアについては、米国農務省 (USDA) の 12 月見通しによれば 2021/22 年度の穀物生産量は 1 億 1,460 万トン、うち、小麦は前年度比 12% 減の 7,550 万トンとなる見通し。なお、冬小麦については前月見通しから生産量が上方修正された。

本年 6 月から小麦、大麦、とうもろこし、9 月からひまわり油に可変輸出関税が導入されており、現在も継続中。中でも小麦の関税額は大幅に上昇し、6 月当初の 28.1 ドル/トンから 12 月 17 日時点で 94.0 ドル/トンまで上昇している。

さらに、ロシア経済発展省は、2022 年 2 月 15 日から 6 月 30 日まで、小麦、とうもろこし、大麦、ライ麦計で 1,100 万トン、うち小麦 800 万トンの輸出枠を導入する予定と発表した。

ウクライナについては、同じく USDA によれば、2021/22 年度の穀物生産量は 8,460 万トン、うち、小麦は前年度比 30% 増の 3,300 万トン、とうもろこしは、干ばつのあった前年度と比較して 32% 増の史上最高となる 4,000 万トンとなる見通し。

なお、小麦については、2021/22 年度の輸出上限数量を 2,530 万トンとすることで、政府と業界との間で合意がされている。

Ⅱ 2021 年 12 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、11月末、280ドル/トン台半ばで推移。12月に入り、旺盛な世界需要から290ドル/トン台半ばまで上昇したものの、USDAの12月需給報告で世界の供給見通しが引き上げられたこと等から270ドル/トン台後半に値を下げた。

その後、米国プレーンズの乾燥天候懸念から値を上げ、12月中旬現在、280ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、11月末、220ドル/トン台前半で推移。12月に入り、小麦価格上昇への追随や南米の乾燥懸念等から12月上旬に230ドル/トン前後まで値を上げた。その後、南米の順調な作付け・生育進捗の一方、肥料価格高騰を背景とする米国の2022/23年度の作付けの伸び悩み懸念やラニーニャ現象に伴う南米の今後の乾燥懸念等から、価格はほぼ横ばいで推移し、12月中旬現在、230ドル/トン台前半で推移。

コメは、11月末、410ドル/トン台後半で推移。12月に入り、バーツ安により410ドル/トン台前半まで値を下げた後、12月中旬にかけてバーツ高に転じたことで410ドル/トン台半ばまで値を上げた後、12月中旬現在も410ドル/トン台半ばで推移。なお、輸出業者は、ベトナム産と比較してタイ産米の高い価格競争力から、コメの輸出量が600万トンの目標を達成出来ると楽観視している。

大豆は、11月末、440ドル/トン台後半で推移。12月に入り、小麦価格上昇への追随や南米の乾燥懸念等から12月上旬に460ドル/トン台半ばまで値を上げた。その後、南米の順調な作付け・生育進捗の一方、米国の中国向けを中心とする旺盛な輸出需要やラニーニャ現象に伴う南米の今後の乾燥懸念等から価格は小幅に上下し、12月中旬現在、470ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から430万トン上方修正され 27.9億トン。消費量は、前月から420万トン上方修正され 27.9億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り28.5%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで上方修正、コメで下方修正され、穀物全体で上方修正され27.9億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで上方修正、コメで下方修正され、穀物全体で上方修正され27.9億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで上方修正され、5.1億トンの見込み。

期末在庫量は、8.0億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は前月からわずかに上方修正された。

(注：数値は12月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.3億トン。消費量は前年度を上回り 6.2億トン となり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、18.3%となる見込み。

(注：数値は12月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：史上最高の穀物生産となった中国

中国の2021/22年度の食糧（穀物や豆類、イモ類の計）生産量は6億8,000万トンを超え、史上最高を更新する見通し。特にとうもろこしや小麦の生産量は史上最高の見通し。一方、国内需要はアフリカ豚熱（ASF）からの豚肉生産の回復から飼料用需要が増加し、これに伴い、飼料用の小麦やとうもろこしの輸入も増加した。ただ、最近是中国経済の先行きの不透明感や国内在庫の積み上がりから輸入量が前年同月を下回る月もある。最近の中国の状況をまとめた。

1 生産動向

中国国家统计局 12 月 6 日公

表の「2021 年糧食生産量データ」によると、2021 年の食糧（穀物、豆類、イモ類）の合計で前年より 2.0%、1,336 万トン増の 6 億 8,285 万トン（コメはもみベース）となった。7 年連続で 6 億 5,000 万トン以上の生産量を達成した。

うち、穀物は 6 億 3,276 万トン（対前年比 2.6%増）。品目別には、生産量の多い順にとうもろこし 2 億 7,255 万トン（対前年比 4.6%増）、コメ（もみベース）2 億 1,284 万トン（同 0.5%増）、小麦 1 億 3,695 万トン（同 2.0%増）で、とうもろこし、コメ、小麦はともに史上最高となった。

特に、とうもろこしは価格の上昇により農家の作付意欲が増加したことから作付面積が増加、小麦も作付時期の土壌水分が潤沢であったことと、収益性が高かったことから作付面積が増加した。これらのことが増産の要因となっている。

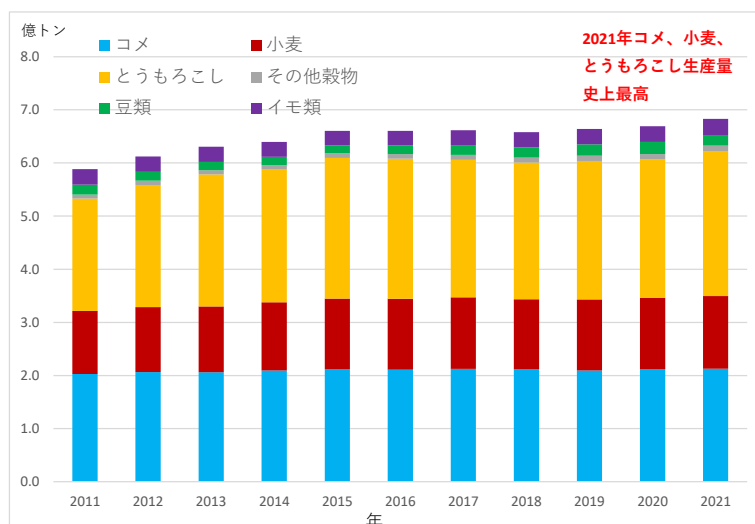
一方、大豆は、とうもろこしと比べ収益性が低かったことから作付面積が減少し、対前年比 16.4%減の 1,640 万トンと生産量も減少した。

地域別の食糧生産量については、東北三省（黒龍江省、吉林省、遼寧省）と内蒙古自治区で大幅に増加（+940 万トン）し、洪水被害のあった河南省の減産（▲280 万トン）をカバーした。

2 国内の需要と輸入の動向

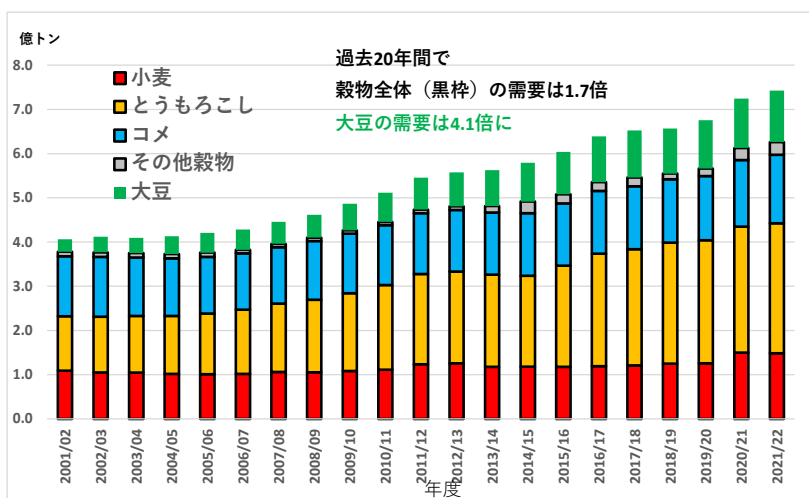
（1）穀物需要は増加

図 1 過去 10 年間の穀物の生産量の推移 2021 年は史上最高



出典：中国国家统计局資料を農林水産省で加工

図 2 過去 20 年の穀物・大豆の需要量の推移



出典：USDA 「PS&D」(2021. 12. 9)を農林水産省で加工

2021/22 年度の穀物需要に関しては、USDA の 12 月見通しによれば、前年度に引き続き、ASF から豚肉生産の飼料向け需要の回復等により増加する見通し。過去 20 年間で 1.7 倍に増加する見通し。

特にとうもろこし、小麦については 2020/21 年度に需要が大きく増加し、とうもろこしは 3% 増加し、価格が高騰したため、代替の小麦需要が 19% 増となった。2021/22 年度も需要量は高水準で継続する見通し。大豆も同様に需要が増加する見通しである。

ASF で落ち込んだ豚肉生産が 2020 年以降回復した際に、レストランなどからの食品残渣などを飼料として給餌していた小規模養豚経営から、とうもろこしや大豆かすなどを配合飼料として給餌する大規模経営に集約されてきた。そのため、ASF 発生以前の水準を超えて、とうもろこしや大豆かすの飼料用需要が増加したことが要因とされている。とうもろこしの需要増により価格が高騰し、小麦の価格を一時上回ったことから、飼料向けの小麦の需要も増加した。

図 3 中国の小麦(鄭州普通小麦)ととうもろこし(生産地)の卸売価格の推移

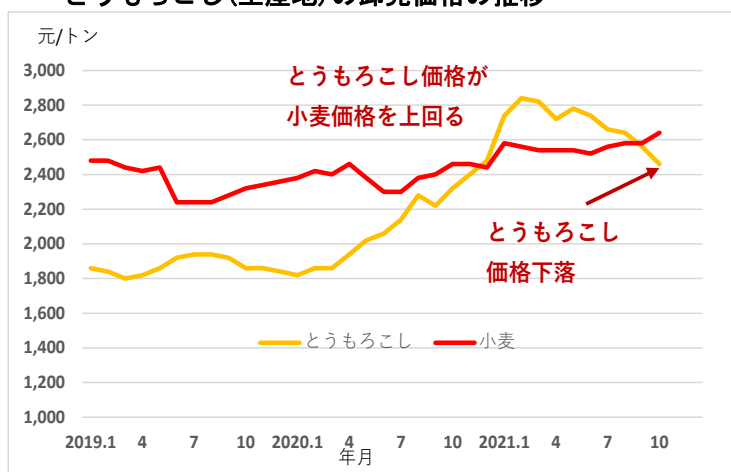
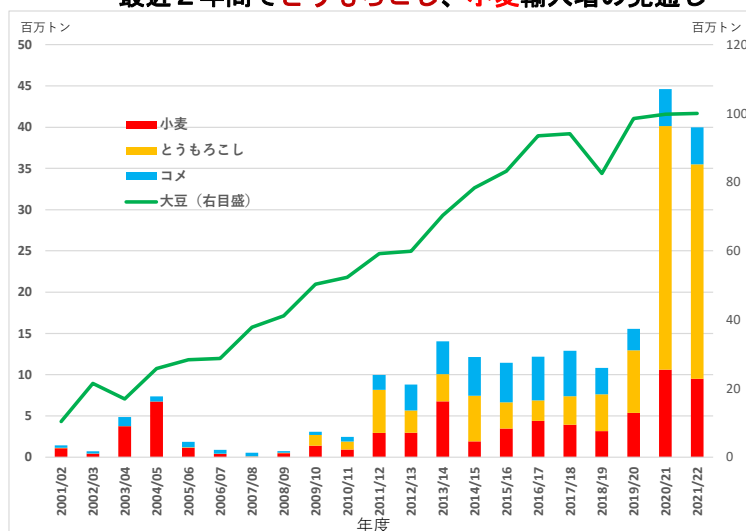


図 4 過去 20 年の穀物の輸入量の推移
最近 2 年間でとうもろこし、小麦輸入増の見通し



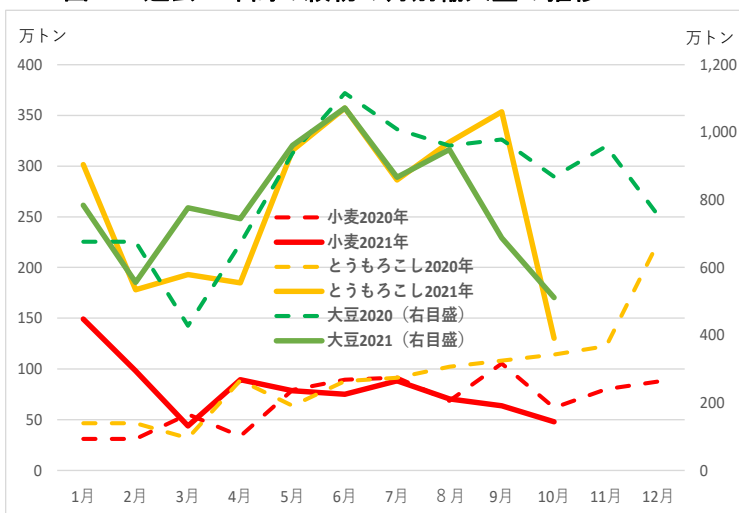
出典：USDA[PS&D] (2021. 12. 9)を農林水産省で加工

(2) 輸入量は増加も伸び悩み。

2020 年に輸入量が 1 億トンを超えた大豆については、海関統計によれば、2021 年 6 月以降、輸入量は前年同月を下回っており、10 月は 511 万トンと前年同月 (869 万トン) を大きく下回っている。1-10 月の累計でも 7,910 万トンと前年同期 (8,322 万トン) を下回っている。

また、2020 年に大幅に増加したとうもろこしや小麦の輸入量は、2021 年の前半もハイペースで続いた。1-10 月の累計では、とうもろこしは 2,624 万トン、小麦は 805 万トンとそれぞれ前年同期

図 5 過去 2 年間の穀物の月別輸入量の推移



出典：中国海関統計を農林水産省で加工

(とうもろこし 781 万トン、小麦 648 万トン) を上回っている。ただし、最近ペースが落ち、10 月のとうもろこし輸入量は前年同月 (114 万トン) を上回るものの、9 月 (353 万トン) より大幅に減少となる 130 万トン。また、10 月の小麦輸入量については、48 万トンと前年同月 (62 万トン) を下回った。

国別にみると、米国産の輸入量は、1-10 月期で比較すると、大豆、とうもろこし、小麦とも増加しており、それぞれ、対前年同期比 1.6 倍、7.5 倍、2.3 倍となっている。2020 年の米中通商協議一次合意以降、中国は米国産の輸入を増加させているが、2021 年も増加傾向が続いている。

コメについても上記作物と比べて規模は小さいが、輸入量が大幅に増加しており、2021 年 1-10 月期の輸入量は 384 万トンで、前年同期比 2.2 倍となり、すでに 2020 年の輸入量の 287 万トンを上回った。なお、内訳はインドやベトナムなどアジア諸国からの輸入がほとんどで、特に最近、インド産が増加している。米国産の輸入量はほとんどない。

3 期末在庫量と今後の見通し

中国政府は穀物の在庫量について公表していないため、USDA の 12 月見通し (4 ページと同じ表現に) によれば、2021/22 年度末の穀物の在庫については、穀物全体で 4 億 7,000 万トン。そのうち、とうもろこしは 2 億 1,000 万トン、小麦は 1 億 4,000 万トン、コメは 1 億 1,000 万トンとなっている。

2020/21、2021/22 年度は増産に加え、とうもろこし等の輸入増により在庫が積み増しされた。

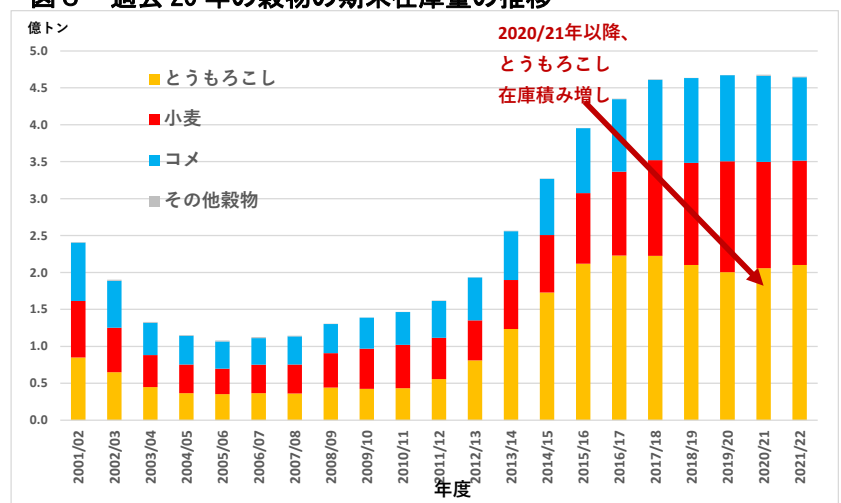
中国の経済成長は、石炭不足による電力需給のひっ迫や、大手不動産企業の経営問題等による影響もあり、減速しているのではないかとの見方もある。一方、来年 1 月以降には春節、北京 2022 冬季オリンピック・パラリンピックが控えている。特に、オリンピックに関しては、中国農業農村部が、開催地 (北京や河北省張家口市) での食料の安定供給を確保する必要があるとしている。

中国の穀物輸入増の要因となっていた豚肉生産に関しても、生産量の回復とともに価格も安定化している一方で、今後は、豚肉の輸入が増えるのではとの見方もある。

このような状況の中、今後の穀物の輸入見通しは不確定であるが、大豆はもちろんのこと、とうもろこし、コメは世界 1 位の輸入国、小麦も世界で上位の輸入国となっている。

中国の上記品目の輸入量は、すべて我が国を大きく上回っていることから、中国の貿易動向により国際相場を通じて我が国が受ける影響も大きいと、引き続き輸入状況を注視する必要がある。

図 6 過去 20 年の穀物の期末在庫量の推移



出典: USDA [PS&D] (2021. 12. 9) を農林水産省で加工

<2022 年当初の中国の主なイベント等>

春節 (旧正月) : 1 月 31 日 ~ 2 月 6 日

冬季オリンピック : 2 月 4 日 ~ 20 日

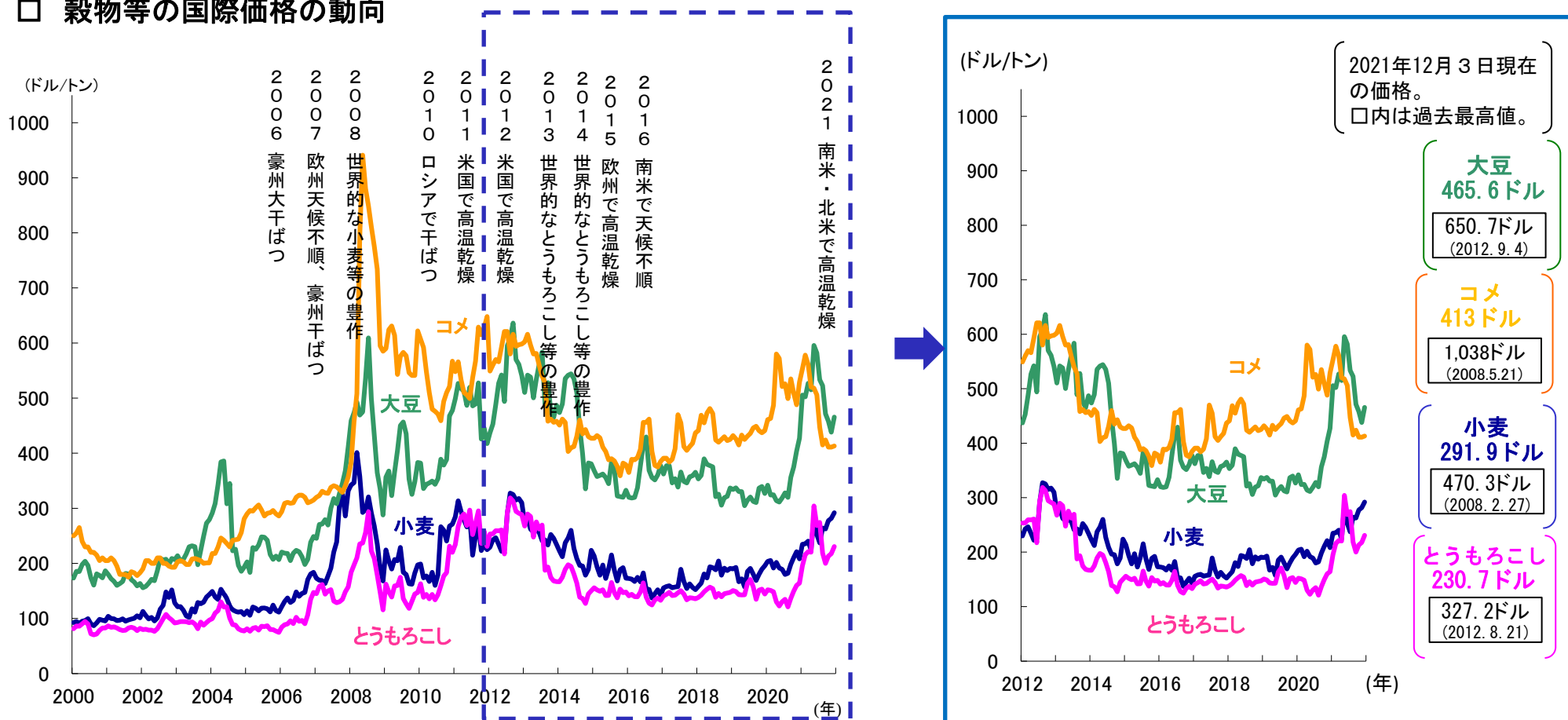
冬季パラリンピック : 3 月 4 日 ~ 13 日

資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



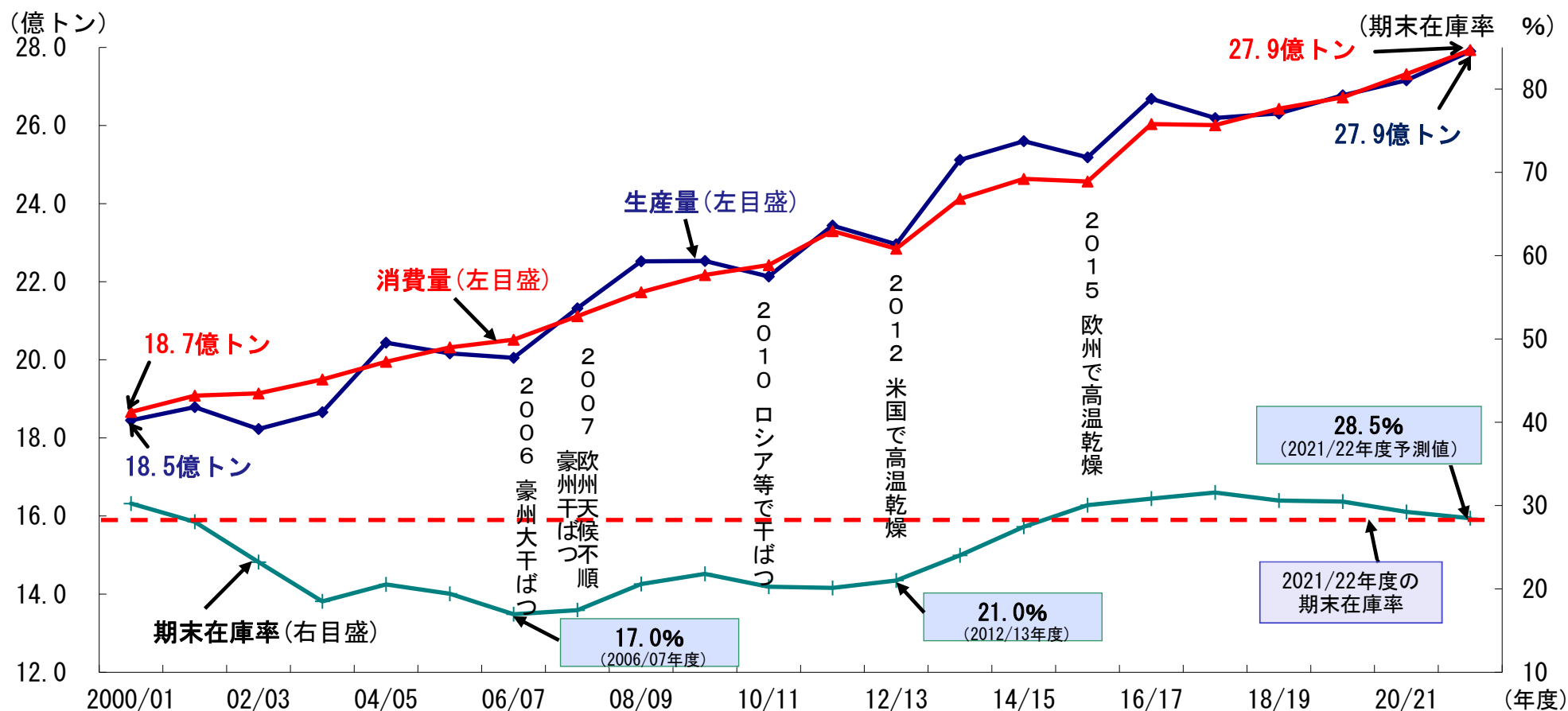
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

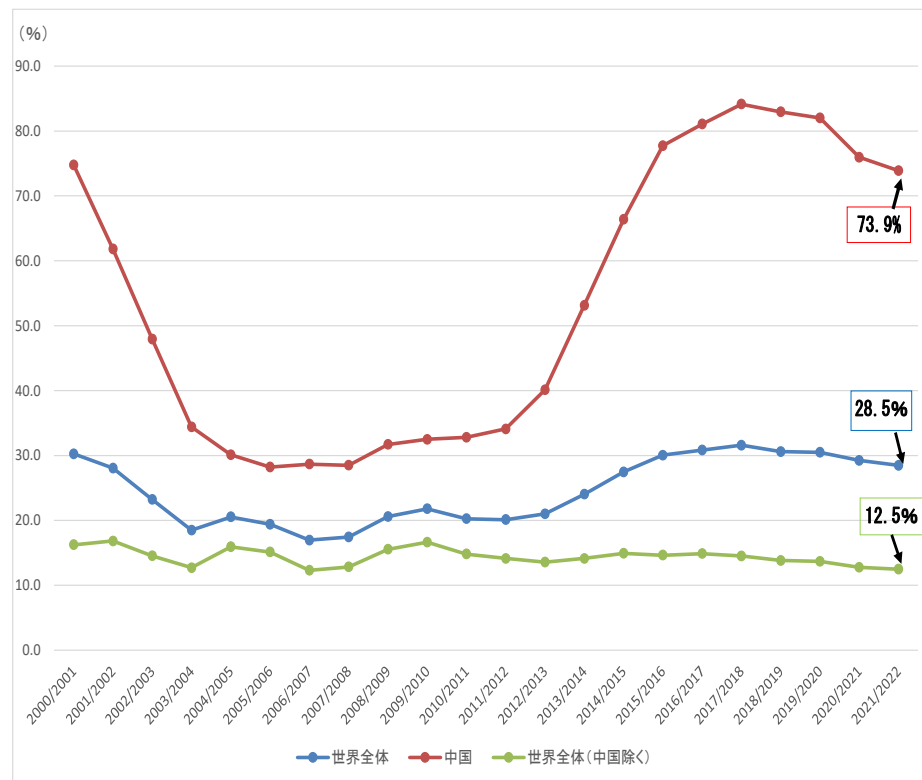


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(December 2021)、「PS&D」

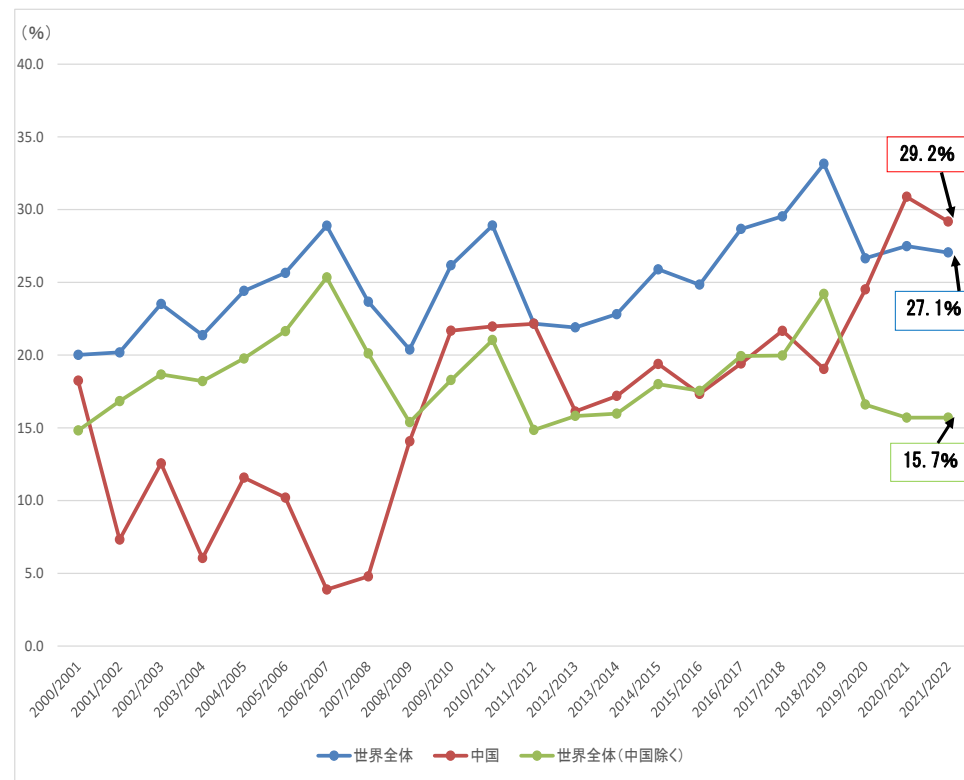
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(Decemberr 9, 2021)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

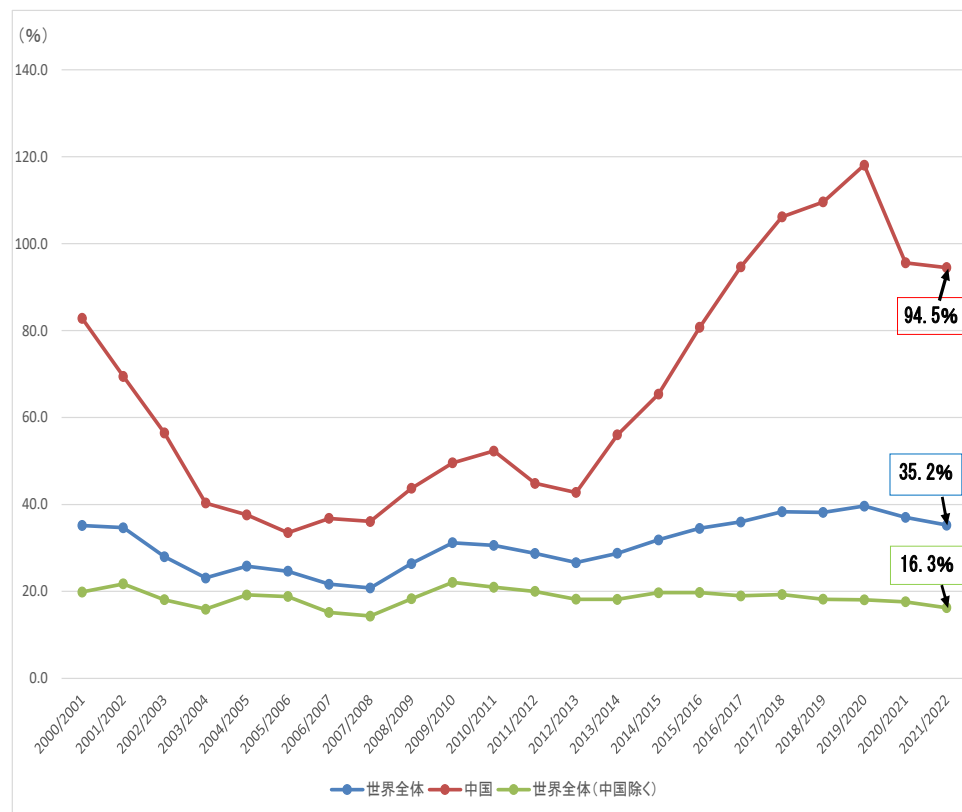
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

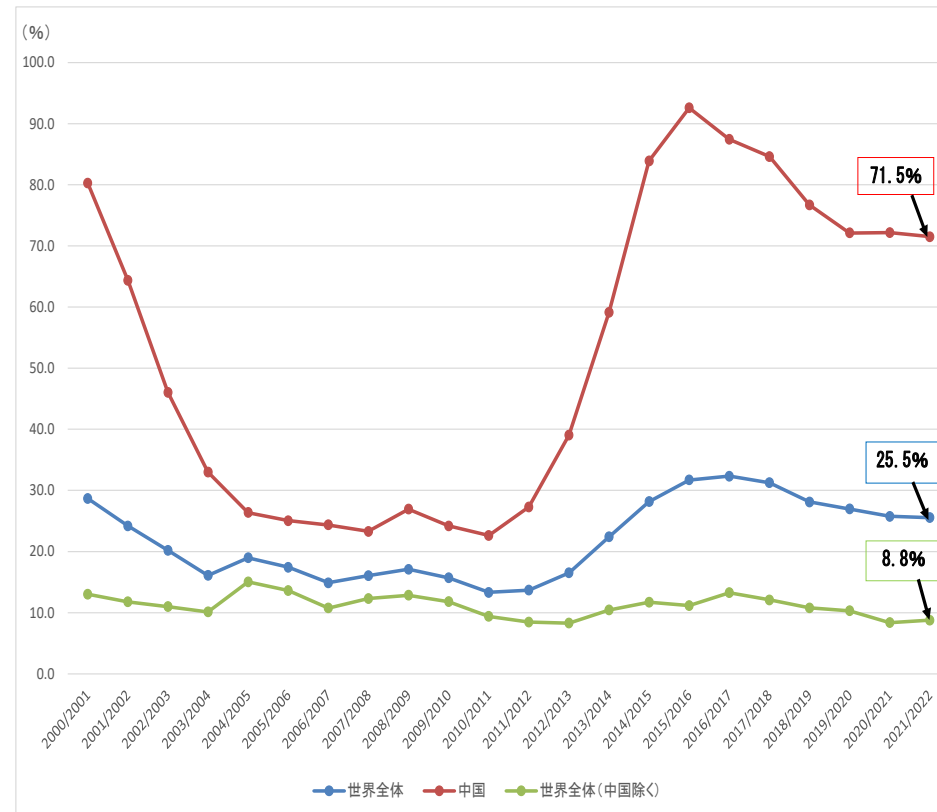
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(December 9, 2021)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

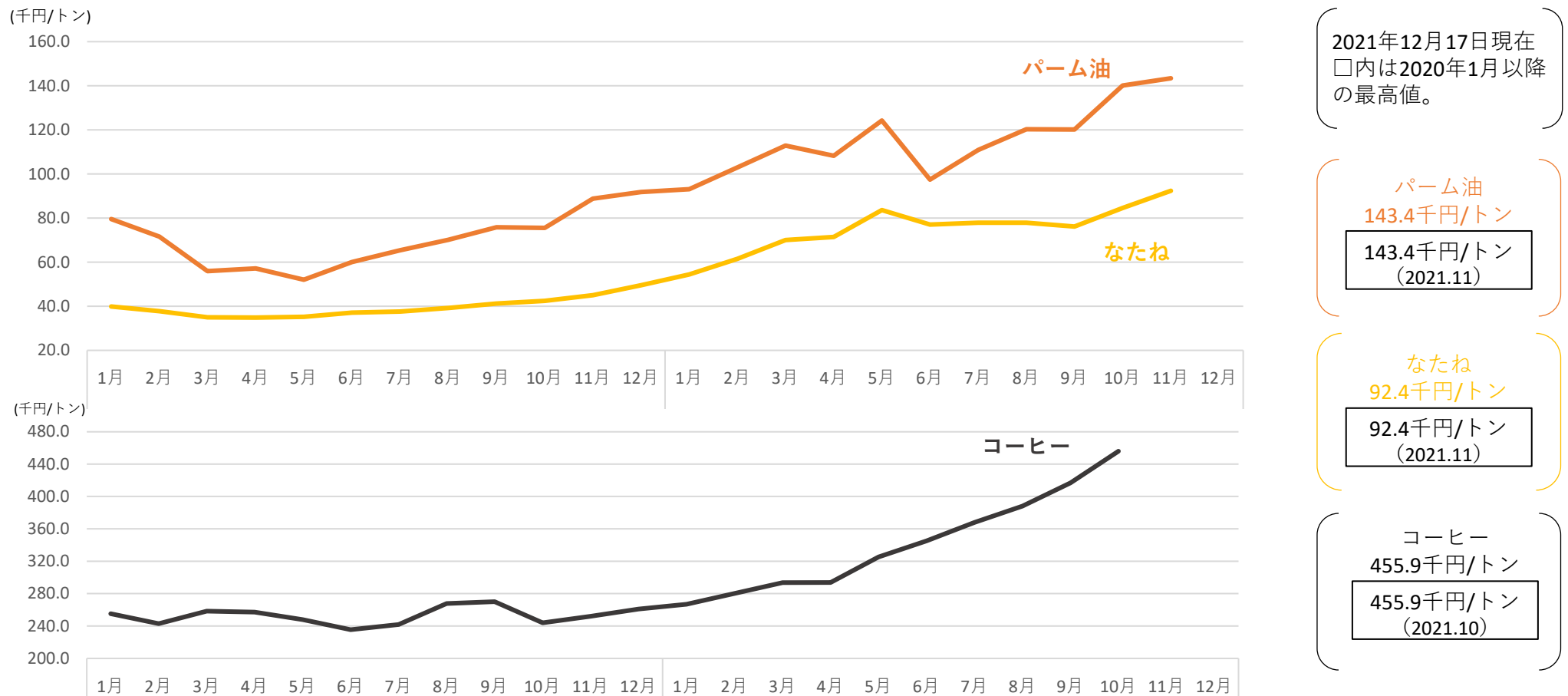
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

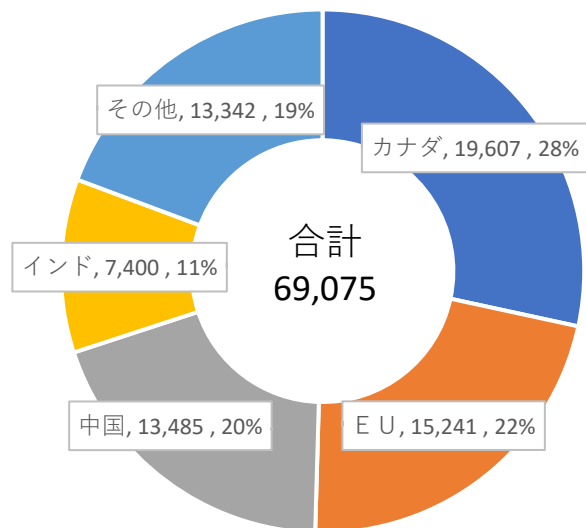


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

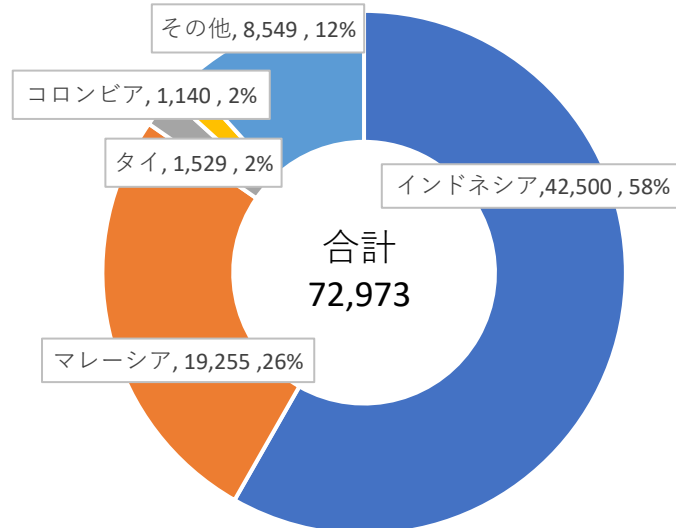
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2019/20）
（単位：千トン）



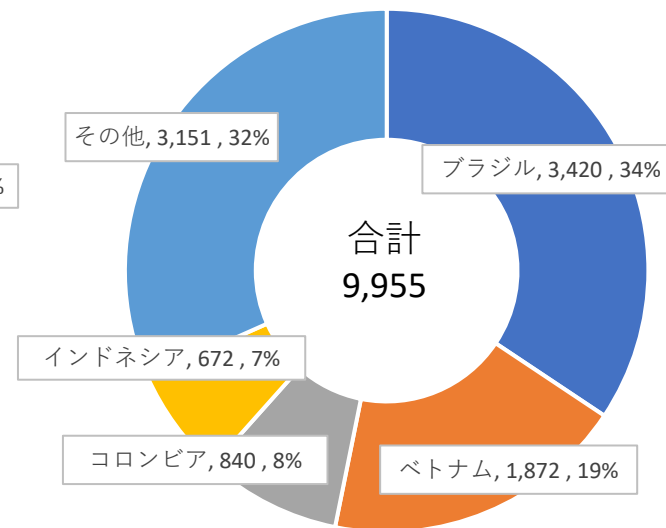
※米国農務省穀物等需給報告

パーム油生産量（2019/20）
（単位：千トン）



※米国農務省穀物等需給報告

コーヒー生産量（2019）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2020年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,194	97.4%
オーストラリア	59	2.6%
その他	0	0.0%
合計	2,252	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	447	58.8%
インドネシア	313	41.2%
その他	0	0.0%
合計	761	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	117	29.4%
ベトナム	101	25.2%
コロンビア	61	15.2%
その他	120	30.2%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	39.9	37.8	35.0	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	
前月比	103.9	94.7	92.6	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	
前年同月比	101.0	94.9	91.6	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	79.5	71.6	55.9	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	
前月比	105.5	90.0	78.2	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	
前年同月比	134.5	115.7	96.0	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	255.2	242.8	258.3	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9		
前月比	90.9	95.2	106.4	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4		
前年同月比	104.8	98.3	108.5	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9		

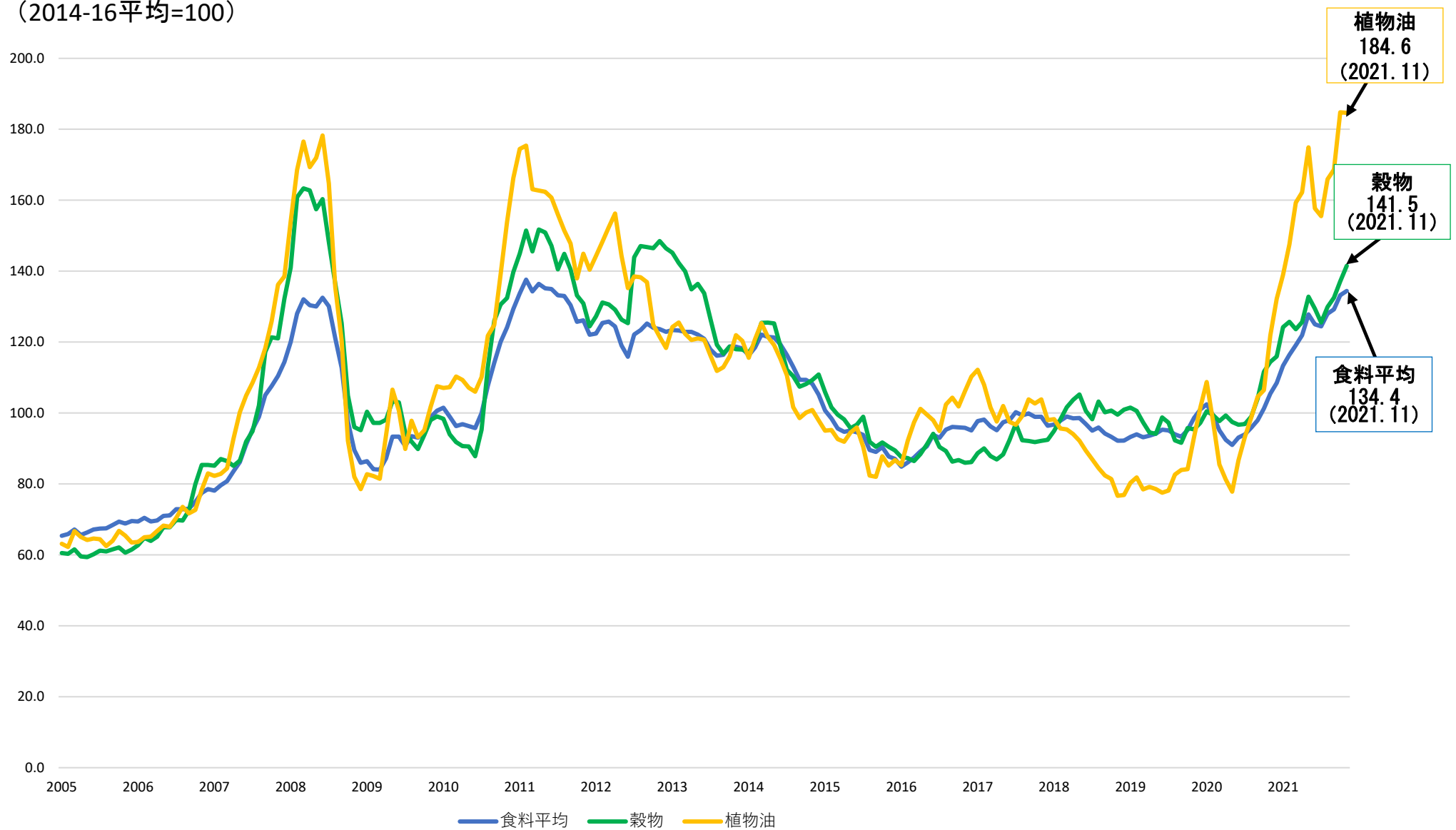
大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2021.12)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

資料6 食品小売価格の動向

○ 令和3年11月の国内の加工食品の消費者物価指数は95.9～120.5（前年同月比で－4.3%～20.7%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和3年6月～令和3年11月）

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和3年6月～令和3年12月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.9	99.6	100.2	101.1	100.0	99.0	99.3	99.4	99.3	99.6	99.7	0.3%
即席めん	96.2	95.7	95.3	98.5	100.0	99.0	100.4	100.2	99.6	100.9	101.0	0.9%
豆腐	98.1	98.6	98.8	99.1	100.0	100.8	101.0	100.8	101.6	102.0	102.6	1.7%
食用油 (キャノーラ油)	106.3	102.7	101.5	100.9	100.0	102.3	103.9	107.9	113.9	118.1	120.5	20.7%
みそ	97.1	96.9	97.4	99.1	100.0	98.6	99.5	98.9	100.0	99.2	99.6	-0.2%
マヨネーズ	103.8	102.3	100.8	100.7	100.0	100.0	108.6	110.2	111.2	112.4	112.5	12.3%
チーズ	97.7	97.3	100.9	101.3	100.0	96.5	98.7	100.6	100.6	98.4	95.9	-4.3%
バター	99.0	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.9	99.8	99.9	99.9	99.8	-0.5%
生鮮食品を 除く食料	96.1	97.0	97.9	99.0	100.0	100.0	100.1	100.1	100.4	100.7	101.0	1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。